

100周年を迎えた今、我々に求められること

「キンカン」の製造販売元として知られる金冠堂は今年、創業 100 年を迎える。
100 年愛されるロングセラーの歴史。そしてキンカンが象徴する「思いやり」とは何か。
社長の山崎充と、ラッパーの般若氏、脳科学者の茂木健一郎氏が語り合う。

100年目のキンカンに 地元ラッパーが連携

茂木 山崎社長と般若さんはどんな経緯で知り合ったのですか？

山崎 私どもの商品コマーシャルを制作するにあたって、般若さんの存在を知りました。しかも金冠堂の本社がある世田谷区の三軒茶屋出身の方だと。

般若 キンカンの本社は僕の実家から歩いて5分くらいのところにあって、子どもの頃から知っていました。友達と会う時に「キンカンの前で待ち合わせね」とみたいな感じで、僕らの日常のなかに普通に「キンカン」がありましたね。

—— そんな般若さんとキンカンのコラボレーション楽曲「地元の唄 キンカン Reminix」が制作されました。

般若 ちょうど僕が三軒茶屋をテーマにした曲「地元の唄」を出したタイミングでその話を頂きました。ストーリーが完全に繋がったので、やらない手はなかったです。地元の友達に「キンカンの曲やるわ」って言ったら「そりゃやるでしょ！」って盛り上がりましたね。

「キンカンと音楽」がっ なぐ思いやりと利他的心

茂木 まさにその時期、あの有名な「キンカンのうた」も生まれましたね。

山崎 あの歌は昭和38年の発表で、作詞が藤浦洸さん、作曲は服部正さん。

茂木 服部正さんといえば、ラジオ体操第一や、数々の名曲を手がけた巨匠。

山崎 作詞の藤浦さん、美空ひばりさんや淡谷のり子さんの楽曲など、数多くの名曲を生み出した大御所です。

茂木 凄いいコンビですね。そんな「キンカンのうた」だけでなく、金冠堂さんは音楽と非常に縁が深い。社長ご自身も本格的なクラシックの道に進まれたそうですね。

山崎 大学時代は音楽を専攻しまして、今でもステージで歌う機会を楽しんでいます。私の父も16歳から93歳の今に至るまでずっとハワイアンバンドを組んで音楽に親しんでいますし、さらに初代は民謡が大好きで、自分でレコードを出して配るほどでした。テレビでも一社提供で「キンカン素人民謡名人戦」(フジ



株式会社金冠堂 代表取締役社長

山崎 充

やまざきみつる / 1965年生まれ

玉川大学文学部芸術学科音楽専攻(声楽)卒。大手製薬会社を経て92年に金冠堂に入社。社長室室長、常務取締役、代表取締役専務などを歴任し05年6月から現職。

茂木 ヒップホップの文化には「リプレゼンツ(Represent)」という言葉がありますよね。レベゼンという言い方でお馴染みのワードです。要するに、地元愛やアイデンティティを表現する言葉ですが、キンカンもまた、地元をレベゼンする存在ですね。

山崎 確かに、キンカンは昭和21年から三軒茶屋に本社を構えておりまして、戦後の大変な時期からずっと地域に根ざしてきました。

茂木 そんなキンカンが100周年。誕生から現在まで、いろいろと興味ぶかい逸話がありますよね。

山崎 もともとは初代、つまり私の祖父が、火傷の薬を作ろうとしたところから始まります。身内に火傷で亡くなった者がいたことがきっかけでした。大正15年に最初の製品を売り出して、当時は、何にでも効く万能薬のような位置づけで親しまれていました。それが時代を経て、肩こりや虫さされ、かゆみの薬になって。戦後は、日本の成長期とともにキンカンも全国へ伸びていきました。

テレビ系列」という番組を、全国ネットで放送していました。

茂木 有名な長寿番組ですね。

山崎 祖父がなぜそんなに民謡にこだわったのかというと、当時、出稼ぎや集団就職で地元を離れて大都市圏で働く人たちが大勢いました。そんな境遇の人々が、地元の民謡を聴いて故郷を懐かしく思い、親御さんに連絡を入れるきっかけにしてほしい。そんな温かい思いがあったからだそうです。

茂木 まさに般若さんの「地元の唄」にもつながる話ですね。僕は脳科学者として導き出した結論があつて、それは「他人に優しくするために、自分らしく生きる」ということです。山崎社長は歌を歌うことが自分らしさで、般若さんはラップそのものが自分らしさの表現ですね。そうやって、本当に好きなものに向き合って自分らしく過ごす時間を持てば、コップの水が溢れるように、他者へのやさしさや愛情があふれ出てくる。

—— 般若さんも昨年、MCバトルの優勝賞金2000万円を全額寄付し、カンボジアの水不足に悩む地域に井戸や給水



脳科学者／理学博士

茂木 健一郎

もぎけんいちろう / 1962年生まれ

東京大学理学部、法学部卒業後、同大学院物理学専攻課程を修了。理化学研究所、英ケンブリッジ大学を経て現在に至る。「クオリア」をキーワードに脳と心の間隔を研究。

塔を建設していますね。

茂木 なぜ井戸だったのですか？

般若 何に対して寄付するかを考えていたときに、一つ思い出したことがあつて。昔、お金なくて公園で寝泊まりしたことがあるんですよ。その時「こんな状況でもきれいな水が飲めるんだな」って思ったことを鮮明に覚えていて。賞金の使い道は「水だ」と直感したんです。

茂木 きれいな水が飲める。これは日本に住んでいると、当たり前ですけどね。だから現地に行つて、改めて「自分は恵まれているな」と思いました。

般若 蛇口を捻ればいつでも飲み水が出て、飯も食えるし、風呂にも入れる。本当はそれだけで十分に幸せなんですよ。

金冠堂が夢見る未来と「幸せ」の時間

—— 山崎社長は「次の100年」に向けて、どんなことを考えていますか？

山崎 皮膚の炎症や痒みを抑える薬のメーカーとして、皮膚の研究をしっかりやりたいです。荒唐無稽に聞こえるかもしれませんが、例えば「今日は皮膚が疲れているから張り替えよう」みたいな、そんな未来を夢見しています。

茂木 いいですね。般若さんはご自身の未来をどう描いていますか？

般若 僕は「身近な存在」ですつといたいなと思っています。世間から「あいつ、かっこいいな」と思われるより「あいつ、いい歳して馬鹿なことやってるなあ」って思われている方がいいですね。

山崎 そういう親近感には、すごく共

感じます。キンカンもそうありたいと思つていて、私はそれを「タクト(tact)」という言葉で表現しているんです。

茂木 「機転」とか「如才なさ」という意味ですね。

山崎 そこには「気配り」とか「いたわる」といったニュアンスもあつて、たとえば友人や同僚のなかに「なんかいいよな」って人いますよね。気が利いて、先を読んで相手を思いやれる人。いわゆる痒いところに手が届くような、そんな人間でありたいのです。私もうちの社員も。

茂木 痒い所に手が届く。なるほど、キンカンだけに(笑)。最後にお二人に伺いたいのですが、いちばん「幸せ」を感じる瞬間ってどんな時ですか？

般若 僕は……漫画を読んでいる時と、ラーメンを食べている時ですかね。あと、言うことを聞かない愛犬と一緒に寝ている時ですね。いびきがうるさくて、たまにイラッとしちゃいますけど(笑)。

山崎 私個人としては、歌を歌っている時ですかね。それと同様に、誰かに喜んでもらえたときの満足感がいちばんの幸せだとも感じますね。

茂木 やはり自分らしくあることが一番の幸せであり、それが優しさに繋がっていくのです。本日は本当に胸が熱くなるお話をありがとうございました。

対談の様子は、株式会社金冠堂公式YouTubeチャンネル「キンカンチャンネル」にて公開中。



ラッパー
般若

はんにや / 1978年生まれ

95年頃にラッパーとして活動を開始。テレビ朝日系「フリースタイルダンジョン」出演や、日本武道館でのワンマンライブでも話題に。俳優としても多数の映画、ドラマにも出演中。



キンカン

キンカン100周年特設サイト
<https://www.kinkan.co.jp/100th/>

